7

俳諧文庫 七

彌生集

へ 5
1139
7

名古屋井上先生爲尾之耿々篤士
也生所愛酒飲氣格清逸風志
俳諧結交海内之名家稱其技
曰彌生菴之庭前有老梅一株
高十丈餘周圍轉之而嘆其稱焉
葉百蘂也每年花開香氣深
濃々尾生先生必招同志會賞焉

門 へ5
號 1139
巻 7

游戯於其下以爲一場之佳興
余亦屢爲是帖詠以題
者也先生今年方華甲之壽
也海内名家其書畫以賀詞
前至若干葉門人相謀爲一
小冊子上之梓先生請序於余々
亡友遠堂飯泉先生之子也故

廣之傳爲雅人之高志時々仰
先生之門學書少時乃之遊
辭題數言之簡

明治戊子早春書於瓊浦寓舍

山陰　芸石牧野靜翁識

春ひや亀の山し梅柳　鶯笠
鶴起あまゝ鶯をと友　多牙
新ら畳木地の炉縁に取かへて　點平
盃すハころりなれまの　秀石
山低う有るも月の澄つきり　酥因
鈎らゝ案山子のあちこちと向く　不返

出商ひすゝも幸あまき御迁宮　静雲

蕣芽蔭てまた取りゆかれ如　甚雲

挿穂ハ娘の数も知まさりけり　連水

芽出し初葉ハあまりめきたる　為水

修清く一際ゆかし水も夜半家　三友

書院わきし西行の像　活斎

雲切て芋名月のすゞしくと　九峰

雲扇をすてゝ対ゞ来如也ら　笑守

秋もまし暮し露も定まりけり　貞亀

用かあくても依ましせる　箸浦

鞍の椅子並あれへくる花の陰　木栽

ともしきてくる灯も幾之　竹丈

十ちより若手の壇を取て来て　栗外

瓢の井さ米をいつもの　拓常

蓬武者さ墨の衣をかしらへ　甫立

きうま八宿も明如雲わ　雲湾

蒲巻て名をかまへる石蝶義　亀悦

枯すまてま八折つる葉　梅湫

蕙蘭とハちらぬ根岸の小家かな　澄雪

洗ひ髪しく柳あさき形　佳居

志らぬ旅せぬ身極めの寄らひくさ　松田

溪有し舩を入て風待　良春

月の汲つくしぬ泉ハ井能も涼し　素溪

新酒の盃ハまこと立ぬ箸　眉泉

よく干てあらし仕まハ作獅子の獅　淇水

墉のミ多き上京の家　寸舟

叶あまりめつさり深い井戸かな　一菜

口くわめる手拭合あま　埜舟

老松に若木の花ともんありと　稚春

扇めてしたき妻の文台　牧羊

大木の桜ありて深山と名付

られし寺宗近の宝磨ぐ

東京

立ちへる影やこれより龍の里　路平

洞窟の二度の春酒や花の露　永機

少しを残る茶ハ数よりも松の花　文禮

老人の鬚も未来之ゝ初暦　木哉

咲花といはまかしせん花菓籠　採花め

羽后　花餅や花の梅香も匂ひきえ　喰風

越后　一月や風情の春の咲そしめ　素曉

華ありし鶴も飛ふや春の雲　素斧

安藝　実ふや什く人も命よ春の月　架石

伊豆　春風や果る夜あるうちの淋　三友

花数多老木の梅とかされ衣　速水

西京　老松や老緑はりて花緑　犂東

出雲　ひともとの千筋と来む柳かな　曲川

長門　足あとし一光澗し花迎り　梅宿

伊勢　つむ年に陽しや千代の梅花　栗蕉

讃岐　紅くは花に靡けれし春の顔　梅曉

伯耆　老松の葉とかけれてつきありり　晩香

越先きまとと春のある流かな　子来

下総　芽柳や又採打して老木より　旭高

尾張　梅清しつなる梢このさまと夢　静安

東花し咲ひ咲きれ同し数　羽洲

月花や最ひとめぐりの初日の出　遠江　水潤

ひとめぐりして来むし若水　三河　蓬守

けしむかのし　晩寸

自國

千代を経る苔を明暦百千春　木尾

青柳の千里また広し花の主　一車

若やなし年の栄へや花手月　梅睦

若水さて是より花の千とせかな　西岱

梅の香や志るしの九折　青城

先一年あやかりものや年の春　菜堂

春かけて越えや互に花の坂　可堂

坂の数こえして若水し柳かな　芳盞

咲く事を福も寿もあり年の春　芳詞

当たとし若水し嘉の初まし春　寛和

登る程と頂きに広し若の山　雪操

暦とも唐もさまし梅のちからかな　藤六

若水さて只ぬ梅の誇りかな　孝子

老くるまよ以友達そ梅　梅　敏樹

〽菊畑の伸たり枝ハ波まして　西京　芹舎

〽萬代のためし見えて松竹初暦　連梅

〽庭にある枝に名を甲斐の栗穂　一菓

〽葉の葉を露ままかれて鶉の萩秋　翠舟

〽月代や森揺ありの萩ふ　百可

〽短夜の鳴るや佛の雫まり　稲斐

あさふれくこれものめでて枝老乱　大阪　南齢

十分に秋ハ見えたり夕の月　安人

雪崔散やひとりに息て峰に雄　似水

〽情咲のとまり直しぬ石の上　流義

〽ひと粒の月でも放之木兔の峰　神戸　卓志

〽庭掃きせずて柳の下涼れ　伊勢　耕雨

うら猿きして秋立や八重葎　藏中

水鳥のかくれて涼あさき日の風　尾張　はしめ

〽ぬれ玉の蘭の花あり初鶉　可洗

庭咲の一時あり山ぞくる　荷庭

鶺鴒の来く背ぬくや水の秋　秀石

罪憎まつ馬に照る夜の月　三机

影さし十一日の月被り那　不退

都まて待しつさや梅に月　甚麦

ミミミ春と露萩ひとまき腕りけり　杜發

丶花月や藤に掃ちす笹の影　蘇白

春風の色をこころよ小松原　三河　石芝

名月や雨の夜すまもあり売り　半仙

丶時々これハまことの夜さき枯葉　杜堂

ミミ草桜や草の三鍛の足ぬきも　遠江　十湖

ミ丶想月血を出して夜さきの那　蕙畝

郭公居くや日中の大井川　洋々

うし湯際冷つく残や初まま寺　駿河　春溪

ミ丶雄よりおこハ踏まず稲むらん　湛氷

暮境や杉の梢の花ぞ紅　眉泉

暖以日を畑まかれの大根かれ　寸舟

丶桜子やらく浅さのけいる破り　まかき

丶山家の粉志ら庵や林の百　蝸堂

丶一万丈の樽や風の松き歌　甲斐　白隣

人の住む村山ハ広し初霞　半拙

日暮りや不来まて人の登り下り　雷石

さしかゝる日の脉きしや芦の霜　相模　寿道

売ハ初のきしきや隣ゟかゝり梯　閑葉

暖かく背中むけまし初日影　上総　帰雪

菜種の雫ハまた付櫻梅の色　下総　釣月

あつまりてよき灯や雨の月　近江　九峰

ひと本も小松植まてや足そめ　竹茲

亥葉や買ふ来ても甚て候　美濃　蓬庵

水引の徒桶にあり除夜の梅　信濃　甚残

鯉も揉くて藻の光波深き　月盛

手をひきし心ましめて菊畑　上毛　光円

まつる日ハ亦ぬしゝある葉子瓜　為流

椽や繁に付し菊の手に　乙瓢

雪の不来雪の世界をまねかり　下毛　茂様

霄の雨以ニ入て船の肌にまかり　妙川

我縁手庭と以ふまや初霞　磐城　扇丙

まかしゝ船日に濡るゝ蓬莱束　岩代　笼蜘

水音やとこともなしに夜長き　帰童

帰つ来て帰て行る郭公　陸前 南山

似た鳥も似た声もなし雨の蔵　陸中 盛虬

畑なかの藁戸もありけしの花　陸奥 有川

錦着て柳もつれる雛の郷　羽後 素山

囀りや鹿の志つまる日もすがら　友月

静かなる水も只流て居る霞の郷　加賀 賢升

赤くなる柱素の居る楼の影　招鶯

雉子鳴や小松かくれの山のはし　佳居

露ふかき影ハかなれ波あきこの萩　良斐

これやこの月日ハ惜し初暦　松円

ちれかかる八千代の坂に梅の主　雪鴻

涼しさの釣りてし千代の坂　證雪

夕かけの影さを揚を下の川　亀悦

芭蕉の梅なとしや深く咲ひの　能登 蘭立

佐保姫の色まさりや男山　越中 百奇

明ほし鳴てある日人まつ波　越後 其譲

茶の色や椿咲く人見ぬ人の来る　晴雲

糊壺に未葉のあきく郎公　沐芳

まつたけや背高く咲し只一本　亀石

櫻かりしわろきに初める日和かな　尤儀

蜘の手まで払ふ駄長や蜂の巣　佐渡 斧刪

○○○ いりみよ入るもこ折れん萩の花　播广 三粒

○ 山寺のより深に声や月とらめ　美作 愛藏

○○○○ 枝の高木の背の晩子仕舞たり　備前 滴翠

春かや雪櫻かくしてそと人も　備中 鶴新

○○○ 庭に生まれ只一本やまつの蛙　有年

ヽ 湯上りし秋の餘寒や初月秋　備後 暁雨

石榴の色すも似ぬ木の一紙　安藝 喜水

ヽ 耳八漏むものに二日も籠る鶉　由池

ヽ 吹き霜のやことに入る五位四五羽　伯耆 鶴樓

向ふ見ずりハ橋あり雪の原　出雲 芋村

ヽヽ 照られても水に飛込む枝蛙　梅屋

ヽヽ 来を送る風を翠まつ蓮の風　石見 静雄

ヽヽ ひとつ家に隣のあるかれ猫　伊豫 南洋

冬の月ちひさく丸く更にけり　土佐 五菖

年中の厭ともりち依のこゝろ　松塘

煙まても深めし菓家の梅の花　讃岐　真海

三の中にある寺も雲の山　河波　拾蕊

簾もみの八ゐさあたり芹の味　雪野

人の行野の出中の小春かな　淡路　周菓

暮るゝや據く岑かる舟上り　晩香

更科や昼の法来も月の人　豊後　乙人

気くもたき舟八景く来寸春の月　紀伊　芹大

忘るゝよ廿日盆と水すゞ　湛水

百羽一昨日花てまた斜める　武蔵　可尊

法来読み深めて引きまた露　知慕

旅先八まさくれ芋し枯尾花　朴囿

花水や薪の窪の起ぬる　楓変

菊掛く一人住ゝよ九折　幻史

旅のは日八一日ありむ数接くの郷　東京　詢莞斎

枯まのし一つふあてゝる扇の風　宗山

さめかるゝ果るさ八ゝ仮萩の花　芦城

流れてめ見へためゝ水まゝ春の草　月彦

旅人の笠着て行よ編あみ　梅年

小一日こゝに遊ぶや人もあれ　金羅

穴に蛇来ぬ練雀きて入りけり　聴松

雪しくや吾妻の萩のさきかけ来　桂堂

暖まる流れに見えし鏡餅　菊浦

海苔の香や月に遊ぶの海辺　笑字

思ひよりうるはしき田植かな　花朝女

さそふ風に花もの桐一葉　良大

火をかるや先稲妻で子を参く　太年

山の雪晴れのさらに積りけり　素水

葦芽やさゝ波寄する利根の水　千畝

春雨に掃く柳やあふる柳　呉仙

日向より川の浅さの見ゆるかな　尋香

旅の人屋根に梅花の咲く　成雅

芽さする露もかし一葉の苗　貞亀

下ゆけは実の付や梅の花　漣々

一寸の麦や鶏の穂植　竹夫

夕立の来て忘れてさそふなり　幹雄

おのつからをしも暁寸　自國　彌生連

老て来の宿し添ふる末の春　芝石

戸ころも童ねて苦し着そ始　雅石

彌生山更に笑ふのまさりけり　牛歩

ひとめぐりして鶯の治まる花の山　美石

幾代まで静かな氣や松の花　松風

坂越しく見え人界や水の海　泉石

千代八千代とめて芽ぐみし庭の花　梅甫

山陰や立あがりけり松の露　雨香

其ふく匂る日和の弥生の風　銀海

其屋御慶し静の春さ　不争

君が影花もよろこぶ風情の風　稲秋

是ほどの実なる梅の弥生の水　嵐休

縄帛に共に喜びたちまちに春の風　笛水

昇る日や伸る若竹長閑なる　芽菜

山ひとつ越れこれし梅林かな　五凤

さくらの春また見えにけりや春の花　路明

千代ゝ千代重ねたまへと着衣始　梅年

折来ゝ座の梅のにほひに酔　玉清

立かへる春や曙ゝ松の色　栄子

あらためて萬としとしの松の色　石風

萬よ惠れ松もことしの君か齢　可帒

自賀

老らく先へ一の字を筆はしめ　鳥牙

若鮎や岸の雫をたらし色　秀牙

雙遊び席の筆ニ盃　思川

薄茶筵春のしめりを茶や唯る　牙

静かハ席以夢を醒ら人　川

月見ては櫻の高ミかもしれぬ　牙

春終りと籠ニかゝる釣柿　川

惣くの俵僅ひの半分り　牙
かしましいもの女子三人　川
何となく地家勤の噂の柏子　牙
秋のましされの肉をみんで通し　川
飛石も念問変りて庭の脈　牙
数寄屋普請の足はくひつく　川
月の雲きられ工合の心よき　牙
ま縁きもあへも移る枯芦　川
蟷螂の横糾代ハ横に来り　牙

酪のいさんしこいわもおかしき　川
笑ふ男蜜の花とあひ向ひ　牙
つれつれ烟をぬける糸抱　川
おきなをまかれて蛇ハ何処へやら　ヽ
喜の家哈き骨の折り甲斐　牙
大名もうり懐あかれて暖ま家　川
とりおきもちて志れぬ合鍵　牙
一年のくらしを為の小商ひ　川
雪の敬波を椽のくまより　牙

垂まはしいふさハ昨日此時分　川

一陣さ草あるまゝハまゝをお　牙

狐よる罠を探りし此寺かな　川

自在の鍋の嗅ハ何せん　牙

月かけをふましてまとくる氷　川

まとまさ揺れて萩も夢かな　牙

知代さ光も濱ての加しら　川

法密といふも皆る秋哉　牙

何かつけるつけ古此ものゝしき　川

舟の都合ハよ此き文来る　牙

呉竹と柳の葉庵もあつめて　川

鶉も家鴨も誠にあらね　牙

明治二十一年十二月

因幡國鳥取湯所町

井上彌生菴藏

生越石風書